
工藤氏の極めて平凡ではない一日

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

工藤氏の極めて平凡ではない一日

【Nコード】

N5956B

【作者名】

月姫

【あらすじ】

平次と和葉の精神が入れかわった？ありえない事態に遭遇した新一の、戸惑いと混乱と健康な高校生男子としての妄想。コメディです。

西からの訪問者

日曜日。

まだ『今日はランチにしようか』と言えるような時間に、インターフォンが鳴った。

蘭じゃない。

なので、無視する。

と、また鳴った。

今度は二回。

「新一い！お客さんだよー！」

蘭がキッチンから声を掛けてくる。

それでも出ないでいると、今度は三回続けて鳴った。

「もう、お客さんだって言ってるでしょうー！」

キッチンでランチの用意をしていた蘭が、インターフォンの画面をのぞきこんだ。

「あ、服部君と和葉ちゃん」

「何だと？」

嬉しそうに玄関に向かう蘭を追い掛ける。

開けたドアの向こうには、何やら深刻そうな表情をした大阪コンビ。

「蘭ちゃん！ー！」

「工藤お！ー！」

俺たちの顔を見るなり荷物を放り出して、蘭に飛びついたのは服部で、俺に抱きついたのは和葉ちゃんだった。

「……えーと、それで？」

取り敢えずリビングに移動して、ラグの上に四人で座り込んで深呼吸を3回。

俺の前には、ふてくされたようにあぐらをかいてふんぞり返る和葉ちゃん。

蘭の前には、涙目になりながら、平手を受けて赤くなった頬を押さえて横座りする服部。

「今朝起きたら、こうなってるな」

面白くなさそうに、和葉ちゃんが服部口調で言う。

「で、俺んトコに来たワケか」

「どうしたらいいか、わからなくて……」

消え入りそうな声で応えたのは、服部。

昨日遊びに出た時は変わりなかったのに、今朝目が覚めると、目の前には自分がいる。

何で一緒に寝てたのかとか、何処に泊まったのかとかはこの際不問にするが、要するに、二人の精神が入れ替わっちまってたらしい。

「向こうに居たら、いつ知り合いに会うかわからんやろ？」

「めっちゃ恥ずかしいんやけど、蘭ちゃんたちなら、匿ってくれるかと思つて……」

見た目と和葉ちゃんの服部に、見た目服部の和葉ちゃん。

……ちよつと眩暈がしてきた。

「ちよつと待て」

そう言い置いて自室に駆け込むと、目的の物を引き出しから引っぱり出して、リビングに駆け戻る。

「コレを使え」

二人に手渡したのは、コナンの頃に使ってた「蝶ネクタイ型変声器」と「マスク型変声器」。

コレを使つて喋らせて目を閉じて聞いてれば、何とか混乱しないで済むだろう。

「おおきに」

目を閉じて、奴らの話を聞く。
うん、これなら大丈夫だ。

精神が入れ替わるなんて、本当にあるんだなあ。

ん？待てよ？

精神が入れ替わったって事は、目の前にいるのは自分だって事で……。

キスする時はどうすんだ？

あ、目を閉じちまえばいいか。

いや、身体的には自分の唇なわけだし、それはイヤだよなあ……。……って事は、Hなんかぜってー無理。

まあ、一人でこっそりと女体の神秘を探ってみるのも興味深いけどな。

「工藤お！！」

「蘭ちゃあん！！」

奴らの話を半分聞き流しながらそんな考察を繰り広げていた俺は、再び抱き付いて来た見た目と葉ちゃんの中身服部を受け止めきれずに、したたかに後頭部を打った。

和葉の中身は平次で

俺ん家のリビングは、ちょっとばかり不思議な事になってた。
いや、見た目はいつも通りなんだが、様子がヘンだって言うか何
と云うか……。

……見た目もちょっと違うか。

俺の前に和葉ちゃん、蘭の前に服部が座ってるってあたりが、も
ういつもとは違うよな。

蘭が淹れてくれたコーヒー片手に、俺は大きなため息をついた。

「何ため息ついてんねん」

俺の前に座った和葉ちゃんが、不機嫌そうに言う。

見た目も声も和葉ちゃんなのに、態度と口調が服部。

……眩暈がする。

「変声器使えよ」

さっきぶつけた後頭部をさすりながら、自分を落ちつかせるため
にコーヒーを一口飲んだ。

いいか、絶対見るんじゃないぞ、俺。
声だけ聞いてる。

ぶつぶつと呪文みてえに唱える。
とにかく、姿を見ねえで声だけ聞いちゃえば、いつもと変わんねえ

んだ。

「工藤、あっちは何や上手い事やっとなるみたいやで？」

蝶ネクタイ型変声器を通した服部の声に、そうつと顔を上げる。

……あの白くて細い指は、服部の代わりに和葉ちゃんが指さしてるからだ。服部の隣に和葉ちゃんがいるからだ。いいな、俺。

自分にそう言い聞かせながら、指さす方を見る。

そこでは、白いマスク型変声器をつけて横座りした服部と、多分俺のトラベル・セットから引つ張り出してきただろアイマスクをした蘭が、楽しげに話に興じていた。

……確かに、賢い選択だ。

ああしてれば、不用意に姿を見る事もない。

見ちまった俺は、正直、ちょっと眩暈がしたけどな。

「……で、こうなった心当たりはねえのか？」

慎重に、目の前の人間の姿を見ねえように、これ以上ねえってくれえ慎重に、向き直る。

「心当たり言ってもなあ……」

よし、変声器は使ってるな。

「なら、昨日からの行動、詳しく話してみろよ」

原因がわからねえと、解決方法も出てこねえ。

これも探偵魂なのか、謎があると解きたくなる。

精神入れ替わりなんてのは、もしかしたら、隣のマッド・サイエニスト向きの現象かもしれねえが、むくむくと湧きあがる好奇心は抑えられねえ。

俺は、二人の行動からその原因を探ってみようと、服部に話を促した。

……その話を聞いてるうちに、俺の興味の対象が『精神入れ替わりの謎』から外れて行つて、頭ん中が探偵から健康な高校生男子になつちまつたつてえのは、口が裂けても言えねえ。

和葉の中身は平次で（後書き）

コメディなので、阿笠邸に住む哀ちゃん——新一が元に戻っている
ので志保さんかも——は、怪しい薬の開発に青春を捧げるマッドサ
イエンティストです。

息抜きは、新一をからかう事。

そのためなら連日の徹夜も厭いません（笑）。

この話では彼女の出番がないのが残念です。

平次の中身は和葉で

「昨日からの行動なあ……」

俺の質問に、和葉ちゃん……じゃねえ、見た目と和葉ちゃんの中身服部が腕を組む。

「昨日は部活も休みやったし、久し振りに遊びに行こうって、神戸まで出たんや」

「……おい、変声器使え」

「ああ、スマン」

服部の話はこうだった。

昨日の土曜日、学校も部活も休みと言う事で、和葉ちゃんと神戸まで遊びに行った。

あちこち遊びまわって、その日は服部家も遠山家も保護者は全部出払って帰宅しないので、そのまま外泊する事にしたらしい。

「……家でゆっくりしてもよかったんやけどな、たまには気分変えたいやろ？」

服部の言う気分てのが何なのかわかって、思わず頷いていた。やっぱり、マンネリってのは良くねえし、たまには刺激もねえとな。

「で、まあ、和葉がまだあーいうトコ入るんに抵抗あるらしいから、おとなしめのトコ選んで泊まったんやけど……」

ああ、確かに彼女、恥ずかしがりそうだよな。

だけど、地元じゃ警察関係にも面が割れててすぐに親父さんたちに報告上がりそうで、そーいうトコに近づけねえから、出先で連れ込みてえって服部の気持ちは良く分かる。

俺だつてこつちじゃムリだ。

それでも、こいつは前から和葉ちゃん連れて二人で遠出とかしてたし、俺よりはチャンスあるよな。

彼女が『まだ』抵抗があるって事は、何度か行つた事があるって事だろ？

俺なんて、まだそーいうトコに連れ込んだ事ねえんだぜ？

……俺もバイクの免許取つとけば良かったか？

あーいうトコってインターの近くとかに多いし、駅から徒歩圏で繁華街だったりすると、蘭も嫌がるだろーし……。

いや、外見のオシヤレなトコ探せばいいのか。
後で探してみよう。

……ここらへんから、俺の意識は、こいつらの精神入れ替わりの謎を解くってトコからズレていったんだが、まあ、健康な高校生男子って事で見逃して欲しい。

キッチンは大騒ぎ

俺の意識が、探偵から健康な高校生男子に急速に移行を始めて数分。

キッチンの方から、がちやがちやがちやと大量の皿が落ちて割れる音が響いた。

それに続いた、蘭と和葉ちゃんの甲高い悲鳴。
思わず腰を浮かしかけて、目の前の服部……見た目と和葉ちゃんの中身服部と顔を見合わせた。

……軽く眩暈を感じたのは、ここだけの話だ。

「和葉ちゃん、大丈夫？」

「蘭ちゃん、こつち見んといて！」

「えっ？あ……きゃあっ！」

がちちゃんぱりん……と、また何枚か皿が落ちた。
多分、グラスも何個か落ちたんだろう。

最初に皿を落としたのがどつちかはわからねえが、2回目の破壊は、思わずふり向いた蘭が、目の前にいた服部——中身は和葉ちゃんだけだな——にびっくりして、落としたんだろう。

その気持ちはわかるぜ。

「片付けはあたしがやるから、先に手当てして」
「うん、ありがと」

手当てって事は、和葉ちゃんは怪我してるって事か。
救急箱出さねえとな。

そう思った時、キッチンから見た目服部の中身和葉ちゃんが現れた。

「工藤君、救急箱ある？」

「オマエはそこに座つとれ。工藤、救急箱は？」

白いマスクをつけた服部が、可愛らしく小首を傾げて和葉ちゃんの声で訊いてくる。

俺の隣にいる和葉ちゃんが、可愛らしい声なのに服部口調で訊いてくる。

目の前がブラックアウトしそうになった。

「おい、工藤！」

和葉ちゃんの声で呼びかけながら、見た目和葉ちゃんの中身服部が、俺を小突いた。

その刺激に、遠くなりかけた意識を必死で繋ぎとめて、俺はサイドボードの下の引き出しを指差した。

どことはつきり言ったワケじゃねえが、わかったらしい。

見た目和葉ちゃんの中身服部が引き出しから小振りの救急箱を引っ張り出して、ソファに座った見た目服部の中身和葉ちゃんの所に行った。

ラグに座り込んだ見た目和葉ちゃんの中身服部が、脱脂綿片手に見た目服部の中身和葉ちゃんの左手を開かせている。

「まったく、何ドジ踏んどんねん」

「せやつて、何や感覚が掴めんくて……」

「オレの身体やねんで？勝手に傷モンにすなや」

「力加減がわからんのやもん……」

「で、包丁滑らして手え切ったんかい」

……………この状況を、どう認識したらいいんだ？

声を聞く限りでは、全部が和葉ちゃん。

口調なら、ちゃんと服部と和葉ちゃんになってる。

見た目も、ソファには服部、その前のラグに和葉ちゃん。

いや、正確に表現するなら、きちんと足を揃えてソファに座った見た目服部の中身和葉ちゃんの前に、ラグに胡座をかいて座った見た目和葉ちゃんの中身服部がいて、見た目服部の中身和葉ちゃんの膝を治療台代わりに、見た目和葉ちゃんの中身服部が傷の手当てをしてるんだが。

……………ソファに座った服部の前で、彼の膝に手を掛けて座ってる和葉ちゃん。

俺の脳内スクリーンは、目が捕らえている映像を健康な高校生男子モードに変換して映し出している。

……………ソファに浅く腰掛けて、ゆったりと寛ぐ服部の前で、彼の膝に手を掛けて座ってる和葉ちゃん。

……………服部の投げ出した足の間に座ってる和葉ちゃん。

……………服部の前に跪いた和葉ちゃん。

待て待て待て！

俺は慌てて、現実を離れていた意識を引き戻した。

俺の脳内スクリーンを総天然色で流れて行く変換映像。

それはそれで楽しいってーか、まあいいかとも思うんだが、じーっと凝視しようモンなら、気配で服部に気付かれる。

ヤツの事だから、俺が考えてる事だって読み取るだろう。

それはちよつとばかりマズい。

いやな、ヤツだって健康な高校生男子だし、2人で猥談だってするし、その延長だっと思えばいいんだが、今はちよつとばかり分が悪い。

それに、キッチンにいる蘭も心配だ。

「蘭、大丈夫か？」

声を掛けながら、俺はキッチンに向かった。

……脳内スクリーンは小さくなっただけで、今も変換映像を流してるってのは、秘密だ。

明日に願いを

夕食は、キッチンに立つてた蘭を適当に言いくるめて、ファミレスのデリバリーを頼んだ。

今、蘭に包丁持たせるのは、少々危険だろうと判断したからだ。

包丁で左手を切った見た目服部の中身と和葉ちゃんの怪我は、病院に行く程じゃねえが絆創膏で済む程には小さくなかった。

痛い思いしてんのは中身の和葉ちゃんだから、そこはちよつとかわいそうだが、傷モンになったのは服部の身体だから、俺には気にならねえ。

それより、蘭が怪我でもしたら大変だ。

……それはさておき、夕食は、妙な緊張感に包まれたまま、会話もなく静かに、尚且つ短時間で終わった。

それというのも、食事中は変声器が使えるえから一切口をきくと、俺が大阪組に厳命したからだ。

大阪組に口をきくなと言ったからには、俺たちだけ会話するってワケにもいかねえし、こいつら前にして何話したらいいかもわからねえしで、結局はただ黙々と食事に専念するしかなかったんだが。

「和葉ちゃんたち、今日はこっちに泊まるんでしょ？」

「うん。このままやと大阪帰れんし……」

「明日、祝日でよかったよねえ」

「うん。お父ちゃんには、蘭ちゃんトコ行くて連絡しといたけど、平日やったら許してもらえんもん」

食後のお茶にと、ジャスミンティーをいれてきた蘭が、マスク型

変声器をつけた見た目服部の中身と和葉ちゃんと、一人掛けのソファを背中合わせにしてお喋りを始めた。

アイマスクの時も思ったんだが、中々賢い選択だ。

「それなら、ここに泊まる？丁度、客間の掃除もしてあるし、いいよね、新一？」

「ああ、かまわねえぜ？」

「じゃあ、いつもの部屋割りでもいいよね？」

「ああ」

いつもの部屋割り。

蘭と和葉ちゃん、俺と服部って事だ。

本音を言えば、蘭を俺の部屋に寝かせてえんだが、友達が来てる時に俺と一緒に部屋ってのは蘭が絶対に嫌がるから、仕方ねえ。

客間は1部屋しか掃除してねえが、ベッドはクイーンサイズのが入ってるから、蘭と和葉ちゃんの2人くらい余裕だ。

服部は、いつもみてえに俺の部屋にソファベッド入れればいいし……。

そこまで考えて、ふと我に返った。

蘭と和葉ちゃん。

俺と服部。

それってマズいよな？

「蘭、いつもの部屋割りって、お前と和葉ちゃん、俺と服部って事だよな？」

念を押すように尋ねたら、蘭が怪訝そうな顔をした。

「そうよ。どうせ、夜明けまで推理談義とかするんでしょ？あたしたちはあたしたちで楽しく過ごすから、探偵さんは探偵さん同士でどうぞ」

既定の事実を告げるように言う蘭は、本気で気付いていないらしい。

「それはいいんだけどさ、どっちの和葉ちゃんと寝るつもりなんだ？」

「どっちって……？」

そこで漸く、俺の言わんとしている事がわかったらしい。

「え」と……」

探偵同士の推理談義となると中身が重要になるワケだが、そうすると身体は和葉ちゃんになるワケで、必然的に蘭は見た目服部の中身と和葉ちゃんと同じベッドに寝る事になる。

いくら中身は男同士女同士でも、やっぱりそれはマズいだろう。かといって、見た目女の子同士でも中身は服部となれば、それはそれで問題だし、俺も許せねえ。

「……服部、客間はお前らが使え。蘭は俺の部屋だ」

「でも！」

「しゃーねえだろ？蘭だって、見た目は和葉ちゃんでも中身が服部だと困るだろ？それとも、見た目服部の中身と和葉ちゃんとでいいか？」

「それは……」

暫くぐるぐると考え込んでいた蘭は、しづしづながらも俺の提案を受け入れた。

見た目服部の中身と葉ちゃんも複雑な表情をしてるが、異存はなさそうだ。

多分、今夜は甘い展開には持ち込めそうもねえが、取り敢えずはOKだ。

あいつらは………やっぱり無理だよな。

俺の健康な高校生男子の変換機能も、そこまでは対応してないらしい。

今日1日、何だかスッゲー疲れたが、まあいいか。

目が覚めたら全ては元通り。

そんな淡い期待を胸に、俺は少し温くなったジャスミンティーを一気に飲み干した。

………翌日、淡い期待が現実になったかどうかは秘密って事でよろしく。

明日に願いを（後書き）

はてさて、明日の朝目が覚めた時、平次と和葉の2人は元に戻っているのでしょうか？

……それは秘密です（笑）。

何にせよ、お疲れ様でした、工藤さん（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5956b/>

工藤氏の極めて平凡ではない一日

2010年10月9日01時44分発行